

部活の惑星

自由の森学園中・高 カバディ部 (埼玉県)

走る格闘技 上

「呪文唱える鬼ごっこ?」「フツ…甘いな!」

4世紀に完成したインドの古代叙事詩「マハーバーラタ(戦記)」には、ある勇者の姿が描かれている。

〈7人の敵に囲まれ、ただ1人で立ち向かう〉

なんとも理不尽で絶望的な古代の戦闘シーンだが、この伝説から生まれた超エキサイティングなスポーツが現代に存在することをご存じだろうか。

時は2016年。その勇猛果敢な競技を極めんとする勇者らが埼玉の山奥にいた――。

「清風、連呼して!」

体育館に顧問の菅香保先生(48)の激が飛ぶ。はっとする部長の俺。すでに汗まみれだ。

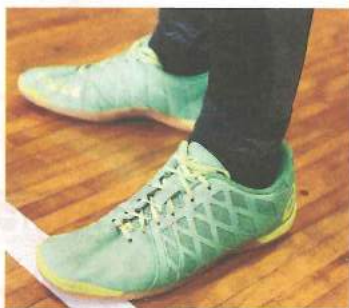
「あ、忘れてた。か、かばで。カバディカバディカバディ……」

ぶつかり合う肉体

〈カバディって、なんか呪文唱えるやつでしょ?(笑)〉

友達と言う。フツ……甘いな。確かにプレー中は何度も「カバディ」と唱えるが、それはこの競技の本質を捉えていない。カバディは肉体と肉体がぶつかり合う熱いバトルなのだ。

1チームは7人。13m×10mのコートをドッジボールのように2分割し、交互に敵陣の相手



を攻撃する。

攻撃と言っても、ボールのような飛び道具は使わない。武器は己の肉体のみ。攻撃側は攻撃手を1人だけ決め、その1人が7人が待ち受ける敵陣に突っ込む。攻撃者が敵にタッチし、自陣に戻ってくれば1点だ。

呪文のような「カバディカバディ……」という言葉は攻撃手がつぶやく言葉で、攻撃の制限時間のようなもの。相手にタッチする前に連呼が止まったり、息継ぎをしたりすると、相手に攻撃権が移るのだ。

ぶつぶつとつぶやきながら、俺は腰を落とす。敵との間を詰めるが、「カバディ」の連呼が肺から着実に酸素を奪う。……う、限界だ……。素早く1人の後輩の懐に入り、指先で相手の

腰にタッチした。

「よし!!」
はあ、はあ……。タ、タッチは、髪の毛一本、服でもかすたらOK。あとは自陣に戻るだけだ。大きく息を吸って、自陣に向かってダッシュした。

服がビリッ

〈カバディって、鬼ごっこみたいなやつでしょ?(笑)〉
これもよく友達に言われる。……だが、それも甘い。

「清風を囲め!」
今度は後輩たちが俺にとびかかった。守備は攻撃手を自陣に戻さなければ1点を得る。攻撃手は鬼ごっこばりに追いかけて回されるのだが、なんせこの競技、「鬼」は1人じゃない。
「うわあっ」

3人がかりで押さえられ、体育館の床に引きずり倒された。

ビリッ。
「あー、シャツが〜(泣)」
とまあ、服が破れることもしょっちゅう。この激しさはレスリングに近い。

〈要は、カバディって?〉
一言で言おう。カバディは、「走る格闘技」だ!!!! (敬称略)

国内競技人口300人

1チーム7人で、公式戦では両チーム計14人が必要。攻撃手は手や足で守備側に触れ、自陣に駆け込めば1点。守備側は、攻撃手の動きを抑えると1点。攻撃権はチームで交互で得点が多い方が勝ち。失点した選手は順にコート外に出るが、チームが1点奪い返すごとに1人ずつ復帰できる。男子は前後半各20分、女子は15分。日本の競技人口は約300人。

部活の惑星

自由の森学園中・高 カバディ部 (埼玉県)

走る格闘技 中

女子とガチ練習。「遠慮しすぎだよ」

我が「自由の森学園カバディ部(通称・ジモディ)」ができたのは5年前のこと。テレビの深夜番組で見て「面白そう」と思った4コ上の先輩が、同学年の友達を誘って作ったのが始まりだとか。

中高で日本初という珍妙な部。だが、昨年末、劇的な変化が起きた。新たに女子部が誕生したのだ。

今春に卒業した先輩が、何人が引く張ってきてくれたのだが、最初は戸惑った。

か弱い女子との取り組み合いに気がひけるって? いや……何を隠そう、俺は女子と話すのすらニガテだ。そして、そもそもうちの女子はか弱くない。

度胸なし

「ねえ清風! カバディのルール教えてよ」

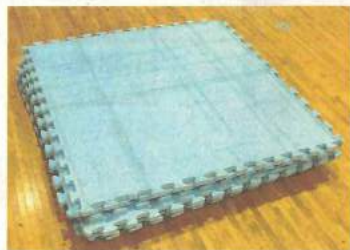
うちの学校は自由な校風で、先輩でも敬語はなし。キャプテンの植松さん(2年)は創部早々、ばんばん質問をしてきた。

「え、えーと……。ユーチューブ見て」

「は? 何それ」

冷たい視線。

い、いや、だってさ。カバディって道具使わないけど結構複雑でさ、うまく説明できないんだよ。あ、もしアレだったら武蔵野創先生のマンガ「灼熱カ



バディ」(小学館)がわかりやすいんでヨロシク。

なんて言えればいいが、そんな度胸なし。心の中でだけ眩き、そそくさと練習に戻った。

「男子〜、遠慮しすぎだよ!!」男女混合の練習が始まると、「カホちゃん」のあだ名で親しまれる顧問の菅香保先生(48)の声が体育館に響く。

カバディはボディーコンタクトの連続だ。守備は、自陣にきた攻撃手を容赦なく床に引きずり倒すのがルール。攻撃手を捕まえるために「チェーン」という守備同士で手をつなぐ基本技があり、仲間との接触も多い。

<今の子どもに不足しがちな「体と体のふれあい」があるのもカバディのいいところですよ>日本カバディ協会のパンフレ

*こんな話です 日本初のカバディ部が作られた自由の森学園中・高(埼玉県飯能市)。部長として男子14人の部員を率いる清風には、「難敵」がいる。昨年末にできたばかりの女子部のメンバーだ。

ットにはそんなことが書いてある。確かに、このスポーツは仲間意識が生まれやすい。実際、男子部員とは体をぶつけあって絆ができた。でも女子との「ふれあい」はさすがに……。

「ほら、恥ずかしがってんのは男子だけだよ!!」

カホちゃんのツッコミがまた飛んできた。

吹っ飛ぶ後輩

女子カバディ部は珍しいが、高校で活動を始めたのは全国で2例目だ。東京の瀧野川女子学園高校がその先駆けで、体育館では男女カバディ日本代表も練習している。で、そんなライバ

ルの存在もあり、練習での女子は「ガチ」である。

「次っ。アレ用意して」

「オスッ」

きびきびと植松さんが後輩に指示したのは、スポンジの入った縦長の青クッション。俺たちは「タックルダミー」と呼ぶ。

パチイッ……。

「あ痛あっ!!」

植松さんが腕からぶつかると、タックルダミーを持っていた後輩が吹っ飛ばされた。

実は女子8人中6人はサッカー部との兼部。ボディーコンタクトなんて、慣れっこだという。

ニガテ、とか言っている場合じゃないや。(敬称略)

部活の
惑星

自由の森学園中・高 カバディ部 (埼玉県)

走る格闘技 下

世界の大舞台へ。つぶやきながら、前進!

自由の森学園カバディ部(通称・ジモディ)に入るまでの俺は、中途半端だった。

何の特技もなかったけど、平和だった小学生時代。そんな日々を、東日本大震災が変えてしまった。小学校の卒業式直後、福島第一原発事故の影響を恐れた親と、縁もゆかりもない島根県に引っ越すことになったのだ。

新しいことに挑戦しようと、体操を始めて体を鍛えた。なのに半年後、母は言った。

「そろそろ戻るか」

「えっ!? 戻るの!?!」

一体、この半年は何だったんだ。関東に戻ってから、とりあえず体操を再開しようと教室に行ってみたが、田舎より厳しくて合わなかった。

結局、中学では技術部。

俺、何がしたいんだろう……。なんだかもやもやしていた。

カバディと出会ったのは、高校入学後の授業だ。終了後、同級生の智元と俺は、指導者のカホちゃん(カバディ部の顧問)に言われた。

「2人ともカバディ部だから」

「えっ!? 入るの!?!」

まさかの展開にももちろん、最初は戸惑った。だけど、なし崩し的に参加することになった練



習で、1コ上の先輩「てっちゃん」が背中を押してくれた。

「おれ、阿部哲朗。一緒にカバディやろうよ」

「えっ!? あ……ハイ」

身長173、体重73キロのがっちりした体格に優しい笑顔。なぜか、てっちゃんの言葉は素直に受け入れられた。

「日本代表として、アジア大会でメダルを狙う」

それが彼の目標。一度コートに入れば、本当に強くて、まるで歯が立たない。いるだけで空気を変えてしまう人だった。

「俺は、悔しいよ」

昨年8月、そんなてっちゃんも大きな挫折を経験した。

「東日本カバディ選手権大会」で、大学生のサークルに1回戦負けした時だった。

相手は年上だが、てっちゃん

*こんな話です 埼玉県飯能市にある自由の森学園中・高カバディ部(ジモディ)の男子部員を率いる3年の清風。この春に卒業した「偉大な先輩」の存在が、いつも心の支えだった。

がいれば勝てるレベルのはずだった。でも、彼に頼りすぎるあまり、チームは本来の力の半分も発揮できなかったのだ。

「俺は、悔しいよ。」てっちゃんは誰よりも落ち込んでいた。

翌月、そんな彼のカバディに対する熱い思いが実を結んだ。

「経験は少ないが、いろいろな技を器用にできる」と評価され、なんと高校生として初めて日本代表に選ばれたのだ。

「すごいよてっちゃん!!」

ジモディにヒーローが誕生した瞬間だった。

この春、卒業したてっちゃんはいま、社会人チーム「AKS」に所属している。あの夏の大会で優勝した強豪だ。てっちゃんの背中を追う俺も毎週、彼のいるカバディ日本代表の練習に顔

を出させてもらっている。

日本代表選考会

目下、ジモディが目指すのは、6月25日からの「第1回カバディチャレンジカップ」。ただの大会じゃない。20歳以下のジュニア日本代表の選考会を兼ねた一世一代の大舞台だ。メンバーに入れば、てっちゃんと一緒に「アジア大会のメダル」を目指せるかもしれない。

毎日、激しい格闘を続けるのはその夢のため。静かにつぶやきながら、一歩ずつ、前へ。

「カバディカバディカバディカバディ……」

(敬称略、完)

文・増田知基、写真・繁田統史